

財団活動のいま……

観光研究情報室

新たな『旅行年報』や自主研究活動と連動した『第24回旅行動向シンポジウム』を開催

当財団では、シンポジウムの開催を通じ、研究成果の発信を行ってまいりました。その一つに、例年十二月に開催していた「旅行動向シンポジウム」があります。昨年までの「旅行動向シンポジウム」では、第1部として、直近一年間の旅行市場の動向を振り返りながら、短期・中長期的な市場予測を行ってきました。第2部では、旬の話題を取り上げ、旅行・観光分野にとどまらない多様なゲストをお招きして、観光地づくりや観光関連産業の振興にあたってのヒントを探ってきました。

さて、今年の「旅行動向シンポジ

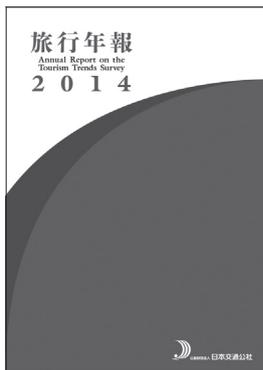


写真1 『旅行年報2014』の表紙

ウム」は、内容のリニューアルを図りました。全体的なフレームとしては、二部構成は変わらず、時期を早めて十一月五日に開催しました（開催概要は67ページ参照）。

第1部では、このほど内容を全面的にリニューアルした『旅行年報2014』（写真1）を基に、直近

一年余の旅行・観光を取り巻く領域の動向について、実際に執筆した研究員が概説する形としました。第2部では、当財団の自主研究活動の中から二つの研究セッションを設定し、同時並行形式で開催するという、学会に近いスタイルを採用しました。

第1部

『旅行年報2014』報告会

『我が国の旅行・観光の動向』

第1部では、参加者に配布した『旅行年報2014』（当財団のホームページでもPDF形式で全文を公開）の内容に沿って、実際に執筆した研究員代表が概説しました（写真2）。

『旅行年報2014』の内容についても簡単に触れますと、今年の『旅行年報』からは、これまで別々の刊行物として昨年まで発行していた『旅行者動向』（二〇〇〇年～）、『Market Insight』（二〇〇六年～）で取り扱っていた日本人の国内旅行や海外旅行の実態と旅行に関する意識調査結果を組み込むとともに、訪日外国人旅行（インバウンド）や



写真2 第1部の様子。牧野主任研究員による「観光産業」の解説

観光政策に関する独自調査結果や、産業別・地方別の特色ある動きを取り上げること、我が国の旅行・観光の動向について総合的に見渡すことができるように構成しました。

当日は、「日本人の国内旅行・海外旅行」「インバウンド」「観光産業」「観光地」「観光政策」の五つのテーマについて、それぞれの執筆代表がプレゼンテーションを行いました。

■開催概要

第24回旅行動向シンポジウム

- ・開催日時：平成26年11月5日(水) 13:30~17:45
- ・参加費：無料
- ・場所：大手町サンスカイルーム
- ・参加者数：117人
- ・主催：公益財団法人日本交通公社

◎プログラム

第1部 『旅行年報2014』報告会～我が国の旅行・観光の動向

●プレゼンター

- | | | |
|-----------------|--------|-----------------|
| 「日本人の国内旅行・海外旅行」 | 中島 泰 | (観光文化研究部 主任研究員) |
| 「インバウンド」 | 相澤 美穂子 | (観光政策研究部 主任研究員) |
| 「観光産業」 | 牧野 博明 | (観光文化研究部 主任研究員) |
| 「観光地」 | 堀木 美告 | (観光政策研究部 主任研究員) |
| 「観光政策」 | 吉澤 清良 | (観光政策研究部 主席研究員) |

第2部 研究セッション

第1セッション「観光推進組織の事業と財源—自立的運営に向けて」

コーディネーター：理事・観光政策研究部長 梅川 智也

- ◆研究報告(1)「観光財源を考える—財源の全体像と協力金を中心に」
観光政策研究部次長 主席研究員 塩谷 英生
- ◆研究報告(2)「温泉地における安定的なまちづくり財源—入湯税を中心に」
観光政策研究部 主席研究員 吉澤 清良
- ◆グループディスカッション
一般社団法人ニセコプロモーションボード 事務局長 大川 富雄氏
鳥羽市観光課 課長補佐 高浪 七重氏
由布市商工観光課 観光新組織準備室 係長 高田 信明氏
協力：温泉まちづくり研究会

第2セッション「新たな観光地マネジメントの手法～持続可能性指標を活用した協働型管理」

コーディネーター：理事・観光文化研究部長 寺崎 竜雄

- ◆研究報告「持続可能な観光地のための指標開発の世界的潮流」
観光文化研究部 主任研究員 中島 泰
- ◆事例報告「アイルランドにおける指標を活用した協働型管理の現状と課題」
観光文化研究部 主任研究員 五木田 玲子
- ◆ディスカッション「持続可能性指標を活用した観光地の協働管理の可能性について」
沖縄県座間味村 村長 宮里 哲氏
株式会社日光自然博物館 営業部 係長 森田 孝道氏
国立大学法人東京農工大学大学院農学研究院 教授 土屋 俊幸氏
環境省自然環境局国立公園課 課長補佐 長田 啓氏
協力：自然公園研究会、環境省「環境研究総合推進費」

特に、「インバウンド」に関する関心は高く、アジア五か国・地域の訪日経験者を対象に行った独自調査結果を基に、訪日外国人が大都市以外の地方を訪れることに対する潜在的なニーズがあることを示した点については、業界紙などでも取り上げられました。

第2部 第1セッション

「観光推進組織の事業と財源—自立的運営に向けて」

観光地全体をマネジメントしていく「観光地経営」を進めていくにあたっては、事業活動を行うための財源をどのように確保していくかという問題について考えることが必要不

可欠です。このセッションでは、観光推進組織の財源確保について、少人数のグループディスカッションを主体としながら議論を展開しました(写真3)。

前半部分では、コーディネーターの梅川理事・観光政策研究部長からの趣旨説明後、当財団からの研究報



写真3 グループディスカッションの様子

告を行いました。まず、塩谷観光政策研究部次長・主席研究員が、観光関連予算の中長期的な推移から見た課題と、自主財源確保に向けた各地の事例について解説しました。吉澤主席研究員は、入湯税に焦点を当て、制度の概要や特徴的な事例について解説しました。

また、入湯税の使途に関する情報公開や入湯税の地元還元を意識して、

「観光まちづくり」に関する事業への配分を高めることなどを要望した当財団が事務局を務める「温泉まちづくり研究会」からの提言内容を紹介しました(47〜53ページ参照)。

後半部分では、阿寒湖・ニセコ、鳥羽市、由布市から実践者三人の方をゲストに招いたグループディスカッションを実施しました。各グループには、地域の実践内容に沿った異なるテーマを設定し、ゲストからの話題提供を踏まえた活発な意見交換が行われました。

第2部 第2セッション

「新たな観光地マネジメントの手法」持続可能性指標を活用した協働型管理」

機関誌『観光文化』216号の特集「指標を活用した持続可能な観光地の管理・運営」(二〇二三年一月発行)をはじめとして、当財団では「観光地における持続可能性指標の活用」に関する自主研究の成果を継続的に発信してきました。

このセッションでは、日本の観光地における実践者や、行政、研究者



写真4 中島主任研究員の発表

といった多様な立場の方々をゲストにお招きし、最新の研究成果の報告と、実務への展開を念頭に置いた議論を展開しました。

前半部分では、コーディネーターの寺崎理事・観光文化研究部長からの趣旨説明後、中島主任研究員が、世界各地における指標開発・運用の経緯や、当財団が二〇〇八年から行ってきた研究内容について報告しました(写真4)。

五木田主任研究員は、二〇一四年十月に実施したアイルランドの現地視察報告を行いました。

後半部分では、沖縄県座間味村および奥日光というタイプの異なる二つの地域の現況と指標運用の可能性について、ゲストの宮里哲氏(沖縄県座間味村村長)と森田孝道氏(株式会社日光自然博物館営業部長)からの報告がありました。さらに、行政の立場から長田啓氏(環境

旅の図書館

「たびつうしょ Cafe」オープン！

「旅の図書館」は、一九七八年(昭和五十三年)の開館以来、広く観光文化の振興に寄与することを目的に、国内外のガイドブックや地域図書などを通して、旅の体験をより深いものにしていただくための情報提供を行ってきました。

近年は、観光研究者や地域で観光の実務に関わる皆様にもお役立ていただけるよう観光研究分野の資料の充実にも力を入れています。加えて、近年の図書館には、図書の収蔵

省自然環境局国立公園課課長補佐)、研究者の立場から土屋俊幸氏(東京農工大学大学院農学研究院教授)の発表がありました。参加者との質疑応答の中では、インバウンド対応に焦点を当てた指標の活用可能性などについてコメントがありました。

(研究員 外山昌樹)

貸出を行う場所としてだけではなく、情報の発信やコミュニケーション、さらにはビジネス支援など、多様な社会の要請への対応が求められる。施設・運営両面で特色を持った図書館が各地に生まれつつあります。

私どもの館でも何かできないかを考え、旅・観光の専門図書館という特色ある「場」を活用し、観光に関わる人(観光研究者や観光実務者)同士の交流と情報交換の機会を提

供することを旨として、「たびつなつ Cafe」を開催しました。

第1回「たびつなつ Cafe」を開催

「たびつなつ Cafe」(以下、「Cafe」)は、昨年十一月二十一日(金)、図書館閉館後の十八時から開催しました。

テーマに『アートと観光』を取り上げ、近年、全国的な広がりを見せている地域芸術祭の先駆けとなった「大地の芸術祭(越後妻有アートトリエンナーレ)」の運営に携わるNPO法人越後妻有里山協働機構・事



写真1 ゲストスピーカーの関口正洋氏

務局長の関口正洋氏をゲストスピーカーにお招きしました(写真1)。

「Cafe」のゲスト(参加者)には、大学教授、地方自治体の職員、観光系シンクタンクの研究員、NPO法人の理事、大学院生など多彩な顔ぶれの十四人の方が集い、当財団からも数人が参加しました。

第一部は、「大地の芸術祭」の概要についてのスライドによる紹介。単にアート作品の紹介にとどまらず、特に芸術祭の舞台となっている越後妻有地域の特性や抱える課題とアートがどのように関わっているかなど、取り組みの経緯に及びました。関口氏の話を通して、

関口正洋(せきぐち まさひろ)氏
一九七四年神奈川県生まれ。東京大学医学部保健学科卒業。大手金融会社を経て、アートフロントギャラリーに入社。第一回大地の芸術祭のスタッフとして、文化交流イベントなどの企画運営を行う。二〇〇二年、千葉市、市原市のニュータウンを舞台に三十八の建築・美術系大学ゼミが参加するまちづくり「アートプロジェクト「菜の花里美発見展」の事務局として関わる。二〇〇三年七月、まったい「農舞台」のオーブンとともに常駐スタッフとして企画展、イベント、棚田の保全、空家プロジェクトなどの企画運営に関わり、現在に至る。二〇〇七年四月より大地の芸術祭の新しい主体としてNPO設立から運営に関わる。

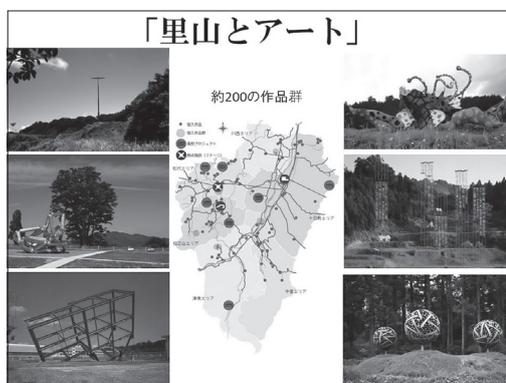


図1 里山とアート(関口正洋氏提供)



図2 越後妻有アートの特性(関口正洋氏提供)

◎「大地の芸術祭」のきっかけは？
なぜアートが地域づくりにつながるのか？

「大地の芸術祭」がクローズアップされていますが、平成の大合併をきっかけに新潟県の企画で立ち上がった「里創プラン」という構想があり、「大地の芸術祭」は四つのプロジェクトの一つとして位置づけられたものです。「過疎高齢化が進む越後妻有における地域おこしの方法を見つける」ことがもともとの課題でした。
越後妻有のアートは、アートが主役というよりも、その背景にある風景や自然を見せるものです。「里山」

と言われる空間に、世界のアーティストが手がけたアートが「里山」を引き立てるようなかたちで展開して、「地域にあるものをどう紹介するか」ということが「大地の芸術祭」のテーマです。

◎「大地の芸術祭」を訪れる人は？

—— 第二回（二〇〇〇年）では美術好きの人が中心に訪れましたが、徐々に一般のお客さんが増え、最近では家族連れや友達同士にまで広がっています。来訪者の声を聞くと「アートはきつかけ。印象に残ったのは食べ物と土地の人の会話」という意見も多くなりました。

越後妻有に来訪する人たちは、冊子を見ながら次はどこに行こうかと自分で考えながら動いています。自分にとっての未知の経験を求めていく人たちが、多少の「負荷」を超えていくことを面白がるような人たちが、自分の中にありながら気が付いていないものが引き出されていく感覚を楽しみながら、「旅」をしているのだと思います。

◎地元との協力関係づくりの秘訣とは？

—— 第一回大地の芸術祭の前年（一九九九年）に「こへび隊」という首都圏の若いボランティアのグループを組織しました。越後妻有にある二万軒の家を全て回る意気込みで芸術祭の案内をしましたが、その当時はなかなか理解してもらえませんでした。

こうして苦戦しながら第一回の芸術祭を開催しましたが、開催中に一部の土地の世話焼きの人たちが手伝ってくれたことで住民との関わりができました。手伝ってみると「結構楽しいぞ」ということで、少しずつ芸術祭に関わってくれる人たちや集落が増えてきました。

きっかけの一つになったのは二〇〇四年（平成十六年）に発生した中越地震かもしれません。芸術祭どころではないという議論もありましたが、このような時期だからこそ開催するべきだということで第三回芸術祭が実施されました。地元の人たちの意識も随分変わり、作品作りのために空き家も提供して下さる

ようになりました。

地元の人たちの参加、協力を前提としたアート作品も増えてきて、今では、喜んで協力して下さいます。自分の得意なことが役に立つことで生きがいを見いだしたり、地域の外の人たちと交流することで自分たちを見直すきっかけになっていることが大きいのではないかと思います。

「たびとじよCafé」を終えて

ゲストからの質問と関口氏による本音を交えての回答が飛び交ううちに予定時間を過ぎ、第1回の「Café」は無事閉店となりました。

「アートへの取り組みが地域にもたらしたものは何だったのだろうか？」

成功の裏にはどんな苦労や物語があったのだろうか？

関口氏とゲストの皆さんの膝を交えながらの交流は、いつもの会議室のそれとは少し異なる発想や感情を呼び起こしたのではないのでしょうか？（写真2）。

ゲストの皆様からは、「実践的な内容で参考になることが多かった」



写真2 関口氏を囲んでの歓談風景

「旅・文化の視点を改めて考える機会になった」「地域と外とのつながりの持ち方が分かった」といった感想をいただきました。

試行錯誤しながら、より魅力ある「Café」を継続的に開催していきたいと考えています。第2回は二〇一四年度内に開催する予定です。（旅の図書館 渡邊智彦・大隅一志）